

平成二十七年八月吉日初版作成

呼吸が祈りそのままになる

高嶋 善三郎

## 目次

呼吸が祈りそのものになる	3
我即神也の真理	3
この世の菩提（神の姿）は、煩惱の中から生まれてくる	4
降ろせる光と我即神也の意識との関係	5
人類一人一人が自らの直観力を磨く	6
新しい能力はひらめきに添って現われる	7
自らの肉体を開発する（チャクラを開く）	8
神とつながるチャクラを開く	8
すべてが光に包まれているという実感	10
神の五感を使ってすべての人の中に神を見出す	10

### （付記）

消えない劣等感とは、どうしたら浄められるのか・・・13

### お願い

より分かりやすくするため、ご感想があれば、お聞かせください。

例えば、この点について分かりにくいとか、どの点が心に響いたとか、新しい疑問があるなど、何でも結構ですので、お聞かせください。

次の連絡先にお問い合わせします。

（電話）04-71-211-3752

（アドレス）[zensan@peach.ocn.ne.jp](mailto:zensan@peach.ocn.ne.jp)

## 呼吸が祈りそのものになる

私たちは、毎日ご神事として、真理の祈りや、印、呼吸法により、自分の周りに宇宙神の光を降ろしていますが、その目的は、何なのでしょ  
うか。この疑問に対する答えを整理してみましょう。

拙書『究極の一筋の光を降ろす大天命』の呼吸法の偉力の項で、言及  
していますが、これを要約すると次の通りになります。

「宇宙の生命力、気、パワーを呼吸し、それらを直接、自分の肉体を  
構成している細胞の中に取り入れることで、調和した肉体を維持してゆ  
くものであるとともに、その呼吸の真のあり方を体得できれば、苦悩も  
病気も老化もなくなるのである。それを我々が自覚することにより、  
「気」(宇宙子)は自然に自らの生命を維持してくれ、かつまた、病気  
を癒してくれるのである。そして、この呼吸法によって、自らの意識を  
宇宙神と一体となることに集中させ、限りなく沢山の光、たくさんを生  
命エネルギー、パワーを体内に吸い込むことができるようになる。こ  
の呼吸が祈りそのものになり、「この祈りを通じて天と強く結びついたり、  
自らの神聖さを目覚めさせ、その本来の無限なる能力を發揮せしめてゆ  
く」と言われています。

この文書から次のことが言えます。

呼吸法により、調和した肉体を維持してゆけるが、呼吸が祈りそのも

のになること、自らの神聖さを目覚めさせ、即ち我即神也の意識となり、  
その本来の無限なる能力を發揮せしめてゆくと言われています。

## 我即神也の真理

我即神也の意識を深めるためには、自らの意識を宇宙神と一体となる  
ことに集中させ、限りなく沢山の光、たくさんを生命エネルギー、パワ  
ーを体内に吸い込むことができるようになることがまず不可欠ですが、  
神の分霊であるという意識、即ち私たち人間は、本籍地である神界から、  
この肉体界に降りてきて、愛と調和と美の世界を分霊同志が協力して現  
わそうとしている存在であるという真理を知ることでしょう。

昌美先生のお言葉でいえば、宇宙究極のエネルギーは、人間を通過せ  
ず、今生に現れることは絶対にありえない。人間の肉体は、神に似せら  
れて作られし極めて高度なる組織体であるため、宇宙神そのものの至高  
のエネルギーを媒体におさめ、知覚し、肉体のヴァイブレーションと合  
体し、変形させ、それによって、全人類に対して神の無限なるすべてを  
表現し示してゆく存在であるという真理を知ることです。

このことを知らないと、業想念から解脱することは、とうてい不可能  
といっても過言ではないのです。

何故なら、私たち人間は、この業想念が渦巻く肉体世界に、降りてき  
て、愛と調和と美の世界を現わそうとして宇宙の法則に乗って、常に業  
想念を光に還元し天命を完つすべき存在であり、業想念からの解脱とは、

自分の心から業想念を滅却するのではなく、業想念を光に還元するに  
てあり、消えてゆく業想念に扱われないことだからです。

## この世の菩提（神の姿）は、煩惱の中から生まれてくる

このことについて参考になる五井先生のお言葉があります。

それは煩惱即菩提という概念を解説されたお言葉です。

「煩惱とは字の如く煩い悩むということで、人間が種々な種々  
欲望執着に想い悩むということであり、人間が種々な種々

菩提とは彼岸の体、つまり、人間の真実の姿、本心の姿、正  
覚のすがた、悟り、神仏そのまま、ということでもあります。

この二つの言葉を合わせて、煩惱は即ち菩提だといっているのであ  
ります。一見実に面妖なことばであります。

（中略）

この地上世界は、神そのものが、自らの生命を人間（霊）と  
して分ち現わして、神そのもののすがたを霊の物質化による、  
肉体人間としてうつし出そうとしているものである、というこ  
とと、人間の生命は永遠性のものであって、靈化したり物質化  
したりするものであるが、神仏そのものに本源を置くものであ  
る、という理を認識しないと、この言葉の真実の意味をつかむ  
ことは出来ないのです。

神（彫刻家）が、自分の意図する彫刻を成し遂げようとして、  
素材（地球世界）にむかって、彫刻刀（人間の霊要素）を働き

かけますと、素材（地球世界・物質）から、種々な形で切り屑  
（業想念行為）が飛び散ります。そうして神（彫刻家）の意図  
する彫刻は次第に出来上がってゆくのであります。その彫刻  
（完全なる人間世界）が出来上がるために、いかに切り屑が飛  
び散ったとしても、誰もその切り屑だけを見て文句をいうもの  
はありません。その切り屑がでなければ、素材は彫刻するこ  
とが出来ず、神（彫刻家）の意図がこの地球世界に顕現される  
ことができないからであります。

その完成された彫刻が菩提であり、その切り屑は肉体人間の  
業想念（欲望、恐怖、悲哀、憎悪、妬心）つまり煩惱でありま  
す。この煩惱は自己保存、自他一体の愛の心から起こったので  
すが、この愛が情と流れ、執着となり、欲望となったものでは  
あるが、これはやがて浄化されてくると、本来の愛の心がその  
まま現われてくるものなのであります。

そこで、煩惱は菩提を現わすためのものである、というより、  
煩惱は菩提と離れてあるものではなく、この世の菩提は、煩惱  
の中から生まれてくる、煩惱即菩提である、というのでありま  
す。」（『宗教問答問13』34ページ）

このお言葉で注目すべきは、「この地上世界は、神そのものが、自らの  
生命を人間（霊）として分ち現わして、神そのもののすがたを霊の物  
質化による、肉体人間としてうつし出そうとしているものである、とい  
うことと、人間の生命は永遠性のものであって、靈化したリ物質化した

りするものであるが、神仏そのものに本源を置くものである、という理を認識しないと、この言葉の真実の意味をつかむことは出来ない。煩惱は菩提（悟り）と離れてあるものではなく、この世の菩提は、煩惱の中から生まれてくる」という行です。先の項で触れました我即神也という言葉そのものです。この真理を完全に受け入れない限り、これらの苦悩から救われることはないといえましょう。

ここでは、神を彫刻家とたとえられ、煩惱（苦悩）は、彫刻家の意図する彫刻を成し遂げようとして、素材（地球世界）にむかって、彫刻刀（人間の霊要素）を働かかけたときに素材（地球世界・物質）から飛び散る、種々な形の切り屑（業想念行為）として説明されています。

煩惱（苦悩）をそのようなものと認識すると、どのような苦悩といえども、把われることはなくなるのではないのでしょうか。

### 降りせる光と我即神也の意識との関係

降りせる光は、我即神也の意識の深化の程度によって異なります。意識が深化すればするほど、昌美先生のお言葉で言えば、呼吸の真のあり方を体得できれば無限に増大するのです。我即神也の意識が深化されていなくとも、その量は限りなくあります。

私の体験をお話しましょう。

私は、まだ五井先生がご存命中の時、入信し、七年目のころでした。その当時勤務先の北陸から同志と二人で、研修会に聖ヶ丘道場にお伺

いたしましたことでした。

その日は、五井先生のお誕生日を祝う会の前日で、昌美先生がそのころ女の子供さんたちに日本舞踊を教えておられ、お誕生日を祝う会で五井先生の詩である「こころ」の曲にあわせて創作された舞踊を披露されるため、練習されており、その仕上がりに見に、五井先生が、豊修庵から聖ヶ丘道場の聖壇に來られた時、道場の入口で、五井先生に幸運にも、お会いできました。私は、勇気を出して五井先生に「今晚は」と思い切り声を張り上げて挨拶をさせていただきました。その時、私は、職場でのトラブルで、心はくたくたの状態で、ある意味五井先生に救いを求めていたのかもしれない。

その瞬間五井先生は、私たちのほうを向かれ、「今日は研修会ですね」と声をかけてくださいました。私は「はい、そうです」とお答えさせていただきました。

それだけのやり取りでありましたが、私の心は、まったく変わっていません。とても、言葉では表せないほどの、祝福感にみだされ、深い統一後に得られる、今まで体験したことのない、高い波動に包まれていました。

私は、それ以降いろいろな課題がありました。乗り越えていくことができました。

しかし、五井先生がご帰神されて以降、すべては五井先生のおかげであったとつくづく知らされました。自分の心に自分を赦せない想いに襲われました。その想いを解くことができなくなり、いつもの統一ができ

なくなつたのです。

それを解くため、五井先生のみ教えをあらためて見直しました。五井先生のみ教えや昌美先生のみ教えを整理し、その真理を求めました。

そして、気づいたことは、五井先生からいただいた光により、救われたが、自分自身を開発していなかったということことです。

光をいただければ、その真理を知らなくとも、それなりに余裕が出て対応できるが、我即神也の我の意識を深めなければ、即ち開発しなければ、降ろせる光も限られ、元の心境にもとること心から知らされた思いでした。

### 人類一人一人が自らの直観力を磨く

呼吸法して、我即神也の意識を深化させていく時どのようなことに留意すればよいのでしょうか。

この課題に参考になる、昌美先生のお言葉をみてみましょう。

拙書『究極の光の一筋を降ろす大天命』に整理しております、「宇宙神と直接に交流し、自らを開発する」の項の中から、要点をみてみましょう。

この項で「宇宙神と直接に交流し、人類一人一人が自らの直観力を磨き、本来の力を取り戻し、自らの肉体を開発する」(チャクラを開く)ことにより、自らの生命力を高め上げてゆけばよい。そうすれば、宇宙

神のオーラ(大生命力)は異彩を放ち、究極なる光を我々に送ってくれるのである。

この直観力は私たち神人がそれを意識して、磨いていかなければならぬ。直観力とは、五感を超えた感覚である。味覚、聴覚、視覚、嗅覚、知覚を超えた天のひらめきである。常識を超えた世界からやってくるメッセージ。常識に扱われると、必ず失敗する。得か損か、高いか安いか、良いか悪いか、効率的か否か、新しいか古いか、きれいか汚いか・・・これらの観念を、いや基準を超えたところからやってくる。

これらのメッセージ、ひらめきは心に直に訴えてくる。そのものを手にした途端に気分が悪くなったり、嫌いになったり、不安に駆られたり、不吉な感覚に襲われたら即、やめるべきである。また手にして心が明るくなったり、踊りたくなったり、わくわくしたり、晴れがましい気分になるものなら、よい波動のものである。

これらの直観力をもっと鋭く完璧に身につけるには祈る必要がある。そのためには、第一に自らの観念に気をつけることである。自らが放つ観念と波長が合う、周りの観念を引き寄せてくるからである。

ここで、留意すべきは、自らが放つ観念を浄めておくことである。(この観念は、業観念、別の言葉でいえば、肉体観念、古い習慣性)この観念をなくしていくには、日頃の生き方が大事である。日頃の観念こそ、自分の人生を左右する、幸、不幸を分かつ一大原因なのである。

人類にとって物が何で必要なのか。物そのものが必要であると同時に、物が完成するそのプロセスがもっとも大切である、ということを知り、人類に

気づかせるために、教えるために物が必要となるのである。

すべての物事において、原因はもとより、プロセスもまた結果を左右するということに気づいてゆかねばならない。プロセスそのものも結果を導いてゆくのである。一瞬一瞬の想念こそが自分の人生そのものであることを知らねばならないのである。

否定的想念や言葉は、これからは死語にしなければならぬ。それを人類一人一人が完全に守れば、自然破壊や天変地変は避けられる。一人一人が自分の想念に責任を持てば、世界は必ず平和になるのである。

一瞬一瞬のプロセスに愛があればよいのです。愛を与え、感謝を注げば、それで充分なのである。決して難しいことではない。大変なことでもなければ、面倒なことでもない。ただただ自分の語る言葉に愛を与え、感謝を注ぎ込めば、すべては完璧にうまくゆくのである。完全に調ってゆく。幸いで、平和で、調和に満ちた人生が結果としてもたらせてくるのである。

真理に目覚めたものは必ず救われるのである。なぜならば、そういった否定的想念、暗黒的想念の波動を見極める直観力が大いに養われているからである。そればかりではなく、自らが放つ波動が神の波動、光の波動であり、強力なるパワー、エネルギーを持ち、宇宙神の光の一筋そのものであるため、いかなるマイナス波動からも決して影響は受けないのである。自らの放つ想念、光、エネルギーにより、自らの運命が悪くなるのを見事に完璧に妨げるのであると昌美先生は解説されています。

この昌美先生の言われる真理について、よくよく考えると、五井先生

の「宇宙の法則に乗る」こと、即ち宇宙神の心のひびきに「自己の想念波動を合致させてゆくこと」別な言葉でいえば**自身の自身を主なる存在として、肉体身の自己を後回しにした生活をしてゆくこと**を具体的に示して下さることに気がきます。

### 新しい能力はひらめきに添って現われる

さらに、ひらめきについて、次のように解説されています。

「いづれ神人と称される人々は、近々すべて全員筆舌に尽くせぬほどの知的光明を体験し、閃光のように彼らの意識に対して究極の真理の全容が明らかにされる。彼らが願おうが願おうまいが、宇宙の大進化大創造に参入した神人たちはみな光の中に住し、自らの魂は神と全く同じ不死であることを知るに至るのである。

(略)

究極の真理に目覚めた者は、常に最初にひらめきがあり(無限なる直観)があり、そのひらめきに添って新しい能力が現われる。その能力は努力によって現われるのではなく、素直さ、無邪気さ、明るさ、自由な心、自ら信じる心から生じてくる。(略)

このように神人たちがまず率先して真理を自らの上に顕現させてゆくことによって、それらの生き方が宇宙空間に蓄積され、それが共磁場となって後に続く神人たちの大いなる助けになるのである。」(『白光誌』2002年12月20ページ)

## 自らの肉体を開発する（チャクラを開く）

『白光誌』2009年6月号「チャクラと宇宙エネルギー」において昌美先生は「チャクラの機能と働きの効果」について次のように説明されています。

宇宙における生命の実体は、神性そのものである。そして、生きとし生けるすべてのものが、シンクロニシティの法則によって同時に発生し、同時に破壊しつつ、永遠に存在可能な状態となっている。即ち神性意識体も、霊性意識体も、物質体も、共時的に同時に発生して崩壊している。宇宙においては、時間、空間、分離感が存在せず、すべてが大調和し、進化創造されていく。人間の肉体も、宇宙の法則のもと、宇宙の気と全く呼応して生命活動がなされている。つまり肉体は自らの呼吸を通して宇宙神の無限なる生命エネルギーと交流し、そのエネルギーを体内に取り入れながら、生かされている。

チャクラは、この宇宙神の無限なる生命エネルギーを受けとめ、生命輝かに生きるために不可欠な、魂と精神と肉体を統一・調和する機能を果たし、また我々の神性、霊性を開くために大変必要な器官なのである。

チャクラの機能は、意識の窓を宇宙神に向かって開き、宇宙神の無限なる生命エネルギーを肉体に取り入れることによって、少しずつ活性化されてくるが、交流の深さや仕方により、活性化の度合いが異なる。特に神人たちが現在行っている呼吸法の印は、他のいかなる修行も追従をゆるさぬほどの絶大なるものである。

その印を組み、深く特殊な呼吸法を行なうことで、自らの神性意識体である魂と、物質である肉体エネルギーとが統合し、宇宙神の究極の無限なる光の生命エネルギーを自ら呼吸し、吐くことにより、肉体のエネルギーと究極の宇宙神の無限なる光の生命エネルギーとが一体となり、調和し、フレンドした全く新しいエネルギーの波動圏がこの肉体界に、即ち富士聖地と神人一人一人の周りに創り出される。そうなるこそ初めて、神人たちの肉体の細胞、DNAを通して、肉体を構成している種々さまざまな機能、器官、組織に働きかけられ、閉じたまま、開かずのままであったチャクラが自ずと、開かれてゆく。

また、チャクラの働きは、自らの意識が神性、霊性に目覚め、高次元意識へと次元上昇するにつれて、次第に開いてゆき、それによって自らが自ずと直観し、体験してゆくものである。

チャクラが完全に開かれてくると、その人を通してイエスの宗教画や仏像の光輪にみられるような、黄金色に光輝いた目映いばかりの素晴らしい大光明を四方八方に放つてくると言及されています。

## 神とつながるチャクラを開く

チャクラを正しく開くとはなにかについて、拙書『神意識の顕現』において昌美先生のお言葉を整理していますが、その概要をあらためてみてみましょう。

『白光誌』2010年3月号「神人とチャクラ」において、昌美先生

は、2010年の新年祝賀祭で、五井先生および大光明靈団、宇宙神の  
凄いエネルギーにより、私たちのチャクラは正しく開かれたが、なぜ正  
しく開かれたのかについて次のように解説されています。

チャクラは開いても、権力欲や自我や顕示欲などが少しでもあると、  
チャクラは神と真つすぐにつながることができず、人間の邪な念をミッ  
クスしてしまう。そしてチャクラにより引き出された力は間違った方向  
に使われ、世の中を乱してしまうこともある。また、チャクラが開いた  
ことによって、カルマや死人が見えるようになり、自分でそれを浄めこ  
とが出来ずに狂ってしまったり、不慮の死を遂げてしまう場合もある。

それ故、私たちは正しくチャクラを開くためには、権力欲や自我や顕  
示欲など少しでもあってはならないが、私たちは全員次元上昇すること  
により、そのことをクリアし、チャクラを正しく開かれた。ここで言わ  
れている次元上昇とは、五井先生の指導により、私たち神人および神人  
予備軍全員が、霊的な事には一切関心を持たず、代わりに究極の真理を  
掴んでいくよう努め、即ち善なる愛の生き方、真理に沿った生き方を長  
年実践し、また自らの肉体への感謝も行ない続けて、神と通じる道を自  
然に少しずつ開いていて、チャクラも徐々に開きつつあったことと説明  
されています。

五井先生および大光明靈団、宇宙神が凄いエネルギーを私たちに与え  
てくださったとしても、私たちが次元上昇していなければ、私たちのチャクラ  
は正しく開かれなかったということでしょう。この大光明靈団、宇宙神  
の凄いエネルギーを頂いたことと私たちが次元上昇したこととの関係  
について、昌美先生は卵の中の雛と親鳥の関係にたとえ、雛が殻の中で、

だんだん心臓が出来て内臓が出来て目が出来て、最後に完成した瞬間に、  
自分のくちばしで殻に穴を開ける。この中からの合図で、親鳥がボンと  
殻をつつくことによって、そこから雛が生まれてくると似ていると言  
われています。

また、今回開かれたチャクラについて、今後どのように取り組んでい  
けばよいかを示されています。

チャクラの数は、宇宙子科学では、七つであり、このたびの新年祝賀  
祭でひらかれたのは、上から二番目のチャクラである額のチャクラであ  
り、「叡智のチャクラ」である。チャクラは常に神とつながっているベ  
きものであるが、全身の七つのチャクラの中でも、額と頭頂部のチャク  
ラは神とつながる大切なポイントであり、ここから光の一筋が降り来た  
る(その他のチャクラは、内臓等の“見える器官”と密接に関わり、調  
和に導くチャクラである)。額の叡智チャクラが開き、かつまた怒りや悲  
しみと言った否定的想念が全く作用しなくなると、すべてのチャクラは  
自然と開いてくると言われています。

そして額の叡智チャクラを開いた神人たちが、最初にするべきことは、  
自分自身をコントロールし、自分自身の治癒力を発揮することである。  
それは呼吸法により引き出されてゆき、意識で自分自身のバランスを取  
るのである。そうすると、そのバランスを取る時に、チャクラが開き、  
神との交流ができる生命エネルギーというべき「気」がきれいに入って  
いけば、「今日は砂糖を食へ過ぎた」とかが、自分で判るようになる。

また、病身であっても、それをいかにコントロールできるかが大事で

ある。呼吸法を通して神とつながり、高く精妙なバイブレーションと自分とが、フィット（適合）すると、自分の未来も見えてくるし、自分の行き場所も見えてくる。そうすると不安や恐怖はなくなるのである。ただその日が来るのを待って、最後の瞬間まで自らを高めあげてゆけば、自らの存在が光となり、皆の手本となるような輝かしい移行を遂げてゆけるのである。

さらに、才能や学業や職業、趣味や芸術においても、自分が心から現わしてゆくものを通して、神を顕現してゆくようになる。

このように自分自身が立派になり、謙虚に完璧な神の姿を現わすことによって、世界は平和になってくるのであると言われています。

### すべてが光に包まれているという実感

チャクラが開いたときに個人的に現われるのは、予知能力ではなく、また予言する力でもない。自らの目を通して神を見、また自らの耳を通して神の声を聞くことができ、自らの心を通して神とのつながっていることが判り、自らの肉体もすべて整っていることが判るようになる。

人は、自分の目で現実を客観的に見ていると思っているが、実は自分の意識を通して現実を見ていて、その意識によっては、現実が現実以下に見えている場合もある。だが、神とつながるチャクラが開き、神のバイブレーションがあることが判るようになるので、感覚が微妙になり、風景も輝いて美しく見えるようになるし、また音も味も、妙なる美しいものが感じられる。

そして、自分たちだけが素晴らしいのではなくて、すべての生きとし生けるものが全部つながっていることが実感できる。三次元世界にいながらにして、神界に生きられるようになるのである。

本来、我々は未来を判る必要もないし、「何年後にはこうなる」などというプロセスの出来事を予言する必要はないのである。一瞬にしてすべてが神そのものとなってしまえば、神の心が自分の心として判り、神のなさしめることが自然に判るのである。聴こえてくるものは「絶対に大丈夫。すべてが光に包まれているし、人類の行方はすべて一つである」という神の言葉であり、そして自分もいつの間にか、自らの言葉を通して神の言葉を——人類が本当に行き着く美しい場所を、知らないうちに語っているのであると解説されています。

これから2012年、2020年と世の中が変わってゆく時に、さまざまな予言が飛び交い、予知能力を發揮する人が現われ、また環境汚染や破壊の問題も取り沙汰されるだろう。そのような世界にあって、神人たちは自分自身の姿を通して究極の真理を示すのである。自分自身が完璧に神とつながって「光なのだ、すべては一つなのだ、すべては破壊されることなく、神様の中に包まれて生かされているのだ」ということを実感し、それぞれが神人としての輝かしい生き方を示すことを示すことによって、世の中が自然に変わってゆくのであると言われています。

### 神の五感を使ってすべての人の中に神を見出す

「ここで、自らを開発する要点を整理してみましよう。

まず、直観力を磨くことと、チャクラを開くこととはどのような関係位置にあるのでしょうか。

直観力とは、五感を超えた感覚である。味覚、聴覚、視覚、嗅覚、知覚を超えた天のひらめきである。あらゆるものに把われない。自由自在に動ける、という世界に行くためには、肉体のあらゆる五感六感の想念波動を超えていかなければならないが、それを可能にするのが神我一体の行であり、それが成就した時、直観力がついてくる。お釈迦さまの時代から重要な方法として知られているものです。

「・・・この世の中では、自分の思うことは、なんにも成らない。本当は思う通りになるんですけど、思うようになっていないで、逆に現われている。金持ちになりたい、と一生懸命稼いでも、働いても、金が集まらない。病気を治したい、治したい、と思っても病気で苦しんでいる。仲よくしたいと思っても喧嘩している。そんなことだと思う通りになっていない。ところが本当の世界は思う通りにならないわけです。

神さまの思う通りというのは何か、その前に神さまの世界というものは調和している。みんな仲よくしている。心が平和である。あらゆるものに把われない。自由自在に動ける、という世界です。そういう世界に行くためには、肉体のあらゆる五感六感の想念波動を超えていかなければならない、という方法をお釈迦さまは言葉で教えたし、体でいわれる統一して座禅観法して教えられた。イエスなどもそうです。『心貧しき者は幸いなり』五井

先生著68ページ)

一方、チャクラは、私たちが神我一体になって高次元意識へと次元上昇するにつれて、次第に開いてゆき、それによって自らが自ずと直観し、新しい能力を体験してゆくと昌美先生は言われています。

これから判ることは、直観力も、チャクラも私たちの肉体が靈化するにつれ、益々強くなり、また開いていくことでしょう。

本書9ページにあるように、私たち神人は、上から二番目のチャクラである額のチャクラである、「叡智のチャクラ」が開かれているのです。したがって、今まで超えるべき、肉体のあらゆる五感六感の想念波動が浄められ、神の五感六感になっているのです。

この状態は、昌美先生が10ページにあるように「人は、自分の目で現実を客観的に見ていると思っているが、実は自分の意識を通して現実を見ていて、その意識によっては、現実が現実以下に見えている場合もある。だが、神とつながるチャクラが開き、神のバイブレーションがあることが判るようになるので、感覚が微妙になり、風景も輝いて美しく見えるようになり、また音も味も、妙なる美しいものが感じられる。」と解説されています。

この変化は、釈尊の「色即是空、空即是色」の世界と相通するのに気づきます。

「真の空とは、すべての現われに絶対に把われない境地にな

ることをいいます。普通肉体人間があると思うすべてを無しと捨てきらしているのです。統一の最高境地には、肉体観念はもちろぬ幽体観念、霊体観念を解脱しえた宇宙即自我、自我即真理という境地があります。この境地は何にも無いということではなく、空空漠々という境地ではないのです。自己の中に一切があり、一切の中に自己がある。即ち実在そのものという境地なのです。

その境地を釈尊は空即是色といっているのです。色即是空で空になって、空になった瞬間に現象世界の仮相の色(もの)の世界が、すべて光明燦然たる実在、宇宙に満ちる存在の種々な使命的光(色)として存在してくる。つまり色即是空という色と空即是色という色とは往相と還相の違いであり、仮相の色(もの)と実相の色(光)との相違なのです。五感六感(肉体幽界)で見えるすべての色(もの)を空と切ったとき、この色(もの)は実在と業因縁との混合物として、現われていたので、一度、一切を空と断ち切る、すなわちこの現象のすべてからの把われを捨て切る、現象という幕を切り捨てると、その瞬間改めてこの世がそのまま実在の現れ光明燦然たる姿として現れてくるのです。『般若心経の新しい解釈』12ページ)

「この神の五感六感を使って、我即神也や人類即神也の世界を現わす方法を2007年のご神事として示されています。」

「どんな人のなかにも、神性が宿っています。本心が光輝いてい

ます。したがって、人がどんなにマイナスの様相を呈していても、過去の消えてゆくプロセスと観ることが大切です。家族、友人、知人、会社の人、通りすがりの人にも、批判し非難するのではなく神を見出してください。そのために、五感を使います。それを一日一回行えたら、「成就！」とします。

眼・・・「この目は人のみるだけにあるのではない。人の中に光を見出してゆくための器官である」と意識して使う。

耳・・・「この耳は人の言葉を聞くためだけにあるのではない。真理の言葉を聞くための器官である」と意識して使う。

鼻・・・「この鼻はにおいを嗅ぐためだけにあるのではない。呼吸法によって宇宙神、本心と交流するための器官である」と意識して使う。

口・・・「この口は食べるためだけにあるのではない。真理の言葉を語るため器官である」と意識して使う。

触感・・・「この手足は触れるためだけにあるのではない。大自然、生きとし生けるものの中に神のひびきを感じるための器官である」と意識して使う。『2007年新年祝賀祭で降ろされた神事』

本書冒頭にある、呼吸が祈りそのものになるとは、我即神也の意識のもと、直観力を磨き、神につながるチャクラを開き、神の五感六感の持ち主になるといっているのではないのでしょうか。

そして、「人類即神也」や「神性復活 大成就」の言葉を発し、人の中に光を見出してゆく行の意義が理解できるのではないのでしょうか。

## (付記)

### 消えない劣等感は、どうしたら浄められるのか

祈っても消えない劣等感について、「質問がありました。この想いをどのようにとらえ、処理したらよいのでしょうか。」

「質問にお答えします。」

劣等感は優越感の裏返しのもので、これらの想いは、相対的想念で一方だけあることはないのです。劣等感だけあることは、ないのです。これらの想いは、この肉体界の観念のもっとも典型的な想念、五井先生のお言葉で言い換えれば、眼で見、耳で聞き、想いで分別し、認識しようとする心、善悪を判断しようとする心の因縁性の想念です。他と自分は別々に存在するという、この肉体界以外に世界は存在しないと錯覚し、他と自分を比較する習慣性により生じているともいえます。

本書4ページの五井先生のお言葉により整理してみましよう。

「この煩惱は自己保存、自他一体の愛の心から起こったのですが、この愛が情と流れ、執着となり、欲望となったものではある。」

神(彫刻家)が、自分の意図する彫刻を成し遂げようとして、素材(地球世界)にむかって、彫刻刀(人間の霊要素)を働きかけますと、素材(地球世界・物質)から、種々な形で切り屑(業想念行為)が飛び散ります。そうして神(彫刻家)の意図する彫刻は次第に出来上がってゆ

のであります。」

これを少し理解しやすいように整理してみましよう。

自他一体の愛の心は、神を意味し、自己保存の心は肉体の心を意味します。神がこの肉体界に働きかけると、肉体想念は光により削られてゆく形になります。私たち分霊が光の側の意識になれば、少しも不安も恐怖もありませんが、肉体想念の意識の側にあると、即ち情に流されること、不安や恐怖になり、先の例で言えば、切り屑(自他一体)業想念(自分だ)と錯覚してしまい、即ち執着、把われている状態になるということですよ。

しかし、私たち分霊が我即神也の真理に目覚め、その意識を深めた時、即ち光の側に立ち戻れば、さらに別の言葉でいえば、自分の本来の使命(天命)をあらためて思い起こす、再確認することにより、その悩み即ち把われは、自ずから神の光により浄められ(解かれ)、本来の愛の心(神の姿)がそのまま現われてくるようになりますよ。

これらの想いを浄めるには、まず、「この肉体界は、神そのものが、自らの生命を人間(霊)として分かち現わして、神そのものすがたを霊の物質化による、肉体人間としてうつし出そうとしているものであり、」それぞれ分霊は、より完全なる神の姿を現わす過程にあり、お互いに尊敬し合い、お互いが助け合い、生かし合う、自他一体の愛の心により進化しようとしていることをあらためて思い起こす、即ち我即神也の意識を思い起こすことにより浄められるのではないのでしょうか。